

天文学とプラネタリウム

第145回



今月のお題

人は宇宙をどう描いてきたか



絵画における天体の扱われ方を通じて、宇宙観を探ります。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

5月22日、セーラームーン×天文学な講演会を開催します!

ちょっとした天文学の知識があると、映画やドラマ、アニメなどを見ていて「この時間でこの月の位置はあり得ないな〜」などと気になること、ありません? いちいち突っ込む野暮な視聴者になってしまうがちですが、よくよく考えれば、現実にはあり得ない配置をわざわざすることになんらかの意味があるはず。制作者がどこまで意識的にやっているかは別にしても、そうすると演出の意図に合う、自然に感じる、雰囲気が良いなどの理由があるからこそ、あえて不自然なことをしているのです。

そう考えると、天体が配されているさまざまな作品を眺める眼が変わってきます。作者にとって、天体や宇宙はいったいどんな意味を持っていたのか。作品に描き込まれた天体の意図を読み解くことで、作者が持っていた宇宙観を垣間見ることのできるのではないでしょう。

そんな興味を背景に、天プラでは2月末に東京大学小柴ホールで講演会を開催しました。題して「宇宙図〜人は宇宙をどう描いてきたか」(<http://www.tenpla.net/event/2016/>)。メインゲストは、“天体の図像学”などの著書のある大

阪大学の藤田治彦先生です。美学を専門とされる藤田先生から中世以降の西洋美術において天体がどのように描かれてきたのかを、豊富な写真資料と共にご紹介いただきました。先生のご講演の後、小阪淳さん、片桐暁さん、内藤誠一郎さんら宇宙図制作メンバーもパネリストとして登壇し、宇宙と美術をめぐる四方山話に花を咲かせました。会場からもたくさんの質問をいただき、なかなか楽しい会でありました。

それにしても改めて驚かされたのは、太陽や月、星などがそれぞれに意味を持って絵画の中に配置されていることです。その役割が、絵画の描かれた時代背景に応じてさまざまに変化していく様子は、まさに宇宙観の移り変わりそのもの。私にとっては、ガリレオ・ガリレイが天体望遠鏡を発明した直後にその友人であった画家によって描かれたというクレーターがある月の姿などは、画家の興奮と戸惑いを感じさせ、特に興味深いものでした。誰でも見たことがあるような有名な絵でも、天体に注目して改めて眺めると、また違った印象となるのです。専門家である藤田先生の手引きによって絵画を味わい直すことは、たいへん貴重な機会であったと思います。



講演会の様子。100名ほどが参加しました。

元々このイベントは、宇宙図に連なる美術の系譜を見つけ出すことを目的としていました。しかし、ふたを開けてみれば、宇宙図に行く前に知っておくべき美術と宇宙の深い関係が、大海のように広がっていることがよく分かりました。西洋美術だけでなく、東洋美術の中においては天体はどう扱われてきたのかなど、その興味は尽きません。そのような視点を持って眺めれば、より立体的に美術品を味わうことができることでしょう。今後の美術館巡りの際には、ぜひ意識してみたいと思います。